

知らなかった岐阜と沖縄のつながり

岐阜市立本荘中学校 3年
加藤玲子(かとう れいこ)

1972年5月15日の沖縄本土復帰から50年。今もそこに横たわるのが、沖縄の米軍基地の問題です。沖縄県には31に及ぶ米軍専用施設が存在し、沖縄本島の約15%もの面積を占有しています。国土面積の約0.6%という沖縄県に、全国の約70%もの米軍施設がひしめいているのです。

今日、私が伝えたいことは、沖縄県に米軍基地が置かれるより以前に、私たちの岐阜市に隣接する各務原市にも米軍基地があったということです。

1945年、終戦の年の10月、米軍は、旧日本軍の各務原飛行場を接收し、基地としました。そしてこの飛行場は、「キャンプ・ギフ」と改称されました。このとき、最も影響を受けたのは、基地周辺の住民たちでした。

今も、かつての基地を目の前にして、「理容室チャーリ」という床屋さんがあります。後藤巖さんは、ここのご主人です。去る5月14日、私はこのお店に後藤さんを訪ね、戦中・戦後の暮らしについてお話を伺いました。

アメリカ兵はみんな気さくで、後藤さんは、チョコレート欲しさに基地までよく遊びに行っていたそうです。

夜を迎えるとアメリカ兵たちが町に繰り出します。キャンプゲート前には、派手なネオンに彩られたバーが立ち並び、それは賑やかでした。しかし、酔ったアメリカ兵による喧嘩、銃の誤射、ひき逃げ、暴行、性犯罪事件などが後を絶たず、「日が暮れたら決して町を歩くな。」と、厳しく言われていたそうです。

そして、終戦から5年が過ぎた1950年、朝鮮戦争が始まります。キャンプ・ギフのアメリカ兵は増員され、次々と戦地へ赴きました。町の住民に乱暴を働くアメリカ兵も増えたといいます。

しかし、朝鮮戦争は日本に、敗戦国には異例の好景気をもたらします。これが「朝鮮特需」です。残念ですが、この国は、他国の、そして他人の不幸の上に繁栄していたのです。

1957年、キャンプ・ギフは盛んな住民運動の成果もあって、ようやく各務原から去りました。周辺の英語看板はカタカナに書き換わりました。

この米軍基地、その後どうなったでしょうか。実は移転したのです。移転先は、……沖縄なんです。あの沖縄の米軍基地は、岐阜にあった基地が場所を変えたものだったのです。

なんということでしょうか。他人事だった沖縄の基地問題が突然目の前に迫りました。岐阜県民として、知らずにいた、知らされずにいたことを恥じつつ、言葉にできない思いを持ちました。

岐阜から沖縄への基地移転って、良かったの？残念なの？それとも、かわいそう？どれも違う気がします。

本土復帰したはずの沖縄で繰り返された不幸の数々をご存じかと思います。そしてその苦しみは、私のような者に語れるものではありません。ただ、第二次世界対戦の爪痕が未だ消えぬ沖縄を横目に、自分たちだけ「平和だ、平和だ。」と唱えることには、違和感を覚えます。

私たちの本荘中学校では、いじめをめぐる学びを足がかりに、本当に気持ちよい学校生活を実現するための「思いやり宣言」を定めました。その宣言の四つ目は、「相手の立場になって考えます。」という、命の言葉です。

私はこの基地問題に、いじめに似た構造を感じます。岐阜にあれば反対運動をするのに、沖縄にあるなら全く無関心？それって、相手の立場に寄り添っているといえるのでしょうか。そして私は、「傍観者」でいていいのでしょうか。

3年後には私も成人となり、選挙権を手に入れます。学ばねばなりません。深く考えねばなりません。大切なことを「知らなかった」で済まさない、一人の大人になるために。